

レポーター：五十嵐さん、こちらの作品もユーモアたっぷりの作品ですね。

学芸員：そうですね。サッカーをね、してますよね。

レポーター：みんなで争っている、体は人間なのに顔だけが動物。

学芸員：動物じゃないのもいますよね。

レポーター：えっ、動物じゃないの。

学芸員：虎と。

レポーター：虎。

学芸員：ゴリラ。

レポーター：ゴリラ。

学芸員：は動物ですよ。で、こっちは。

レポーター：イグアナ。

学芸員：わかんないですね。

レポーター：イグアナ。

学芸員：赤いチームと白いチームで争っているところなんですけども、どこの国の作品かっていうのもこれもちよっとね。これを見ただけではどこの国かわかりにくいんですけども。ミャンマー。

レポーター：ミャンマー。

学芸員：2003年に描かれたミャンマーの作品なんですけども、サン・ミンという今60代半ばくらいになる男性が、男性のアーティストが描いた作品です。タイトルが競争。

レポーター：競争。

学芸員：ミャンマーって最近よく話題に上りますけど、去年アウンサンスーチーさんが選挙に出馬してそうやって当確してから、だんだんこう民主化がだんだん進んできていて、日本もいろんな経済投資をしたりとか、ミャンマーがだんだん今までの軍事政権から広がってきて自由に経済的流通をするようになったんですけども。それはその経済が自由になっただけではなく、軍事政権だと一人の独裁者が、全部抑圧しているという状況ですけども、そういう社会だと自由に表現ができないですよ。特に、このサン・ミンさんがいた、卒業した大学はヤンゴン大学といってミャンマーの中で一番頭のいい人達が行く大学だったんですけども、頭のいい人達が集まる学校っていうのはみんな学生運動をするんですね。で、政府のやり方に対して、いや、僕達はもっとこういう風にしたいとか、自由にこういうことを考えたいとか、絵も自由に描きたいとって来たんですけども、それがやっぱなかなか実現しない社会の中をずっと生きてきた人なんですよ。で、その人達がそういうグループがあったんですけども、そのグループに属していたそのサン・ミンさんが2003年に描いた絵なんですけども、実はこの作品はミャンマーではあの展示するのが難しかったと、いう話を聞いたんで

すね。

レポーター：ええー。

学芸員：それはなんでなのかなって思うんですけど、日本から想像するとなかなか想像しにくいんですけども、自由に作品を描くといっても、もしそれが、ちょっと政府を批判する事だったりとか、歴史的に今の政権を批判するような歴史的な事実を描いたりだとすると、政府側は自分が批判しているので、そういう作品をミャンマー国内の中に展示しちゃいけない。っていう風になってしまうんですね。

レポーター：はい。

学芸員：大変な時代だったんだけども、やっぱりどこかユーモラスなところがあって、まあゴリラとか虎とかがサッカーをしたりするわけですよ。これはワールドカップが2002年に日本と韓国で開催されたと思うんですけども、その時のワールドカップをニュースを見て、そこから想像して描いた作品だということなんですけど、選手達も実はなぜ競争しているかという、ただ勝ちたくて競争してるってわけではなくて、選手達も実はあるチームに高く商品として買われたりしますよね。そういう風な、選手も商品として売買されるっていうような経済的な競争のことをいっていたり、後は、強いものが勝っていく弱肉強食というようなことをテーマにして、描いた作品なんです。あとは、ちょっとよく見ると観客が周りにいっぱいいて、下は草になっていまして、一番左のところの宣伝の広告のバーのところ、gangow、ガンゴって書いてあるんですけども、それがまあそのガンゴグループというミャンマーで一番最初にできた現代美術のグループがあるんですけども、そのグループのリーダーを、この絵を描いたサン・ミンさんという方がリーダーをしていたんですけども。

レポーター：はい。

学芸員：そういうちょっと自分が属していたグループみたいなものも、ちょっと広告みたくにして。わざと入れたところにちょっとしゃれっ気があるというか。

レポーター：えっ、こちらもですか。

学芸員：それは彼が友人達と一緒にたてたインヤって書いてあって、インヤギャラリーというギャラリーがミャンマーにあるんですけども、そのギャラリーのことです。

レポーター：えー。もう一つ奥にありますね。

学芸員：その一番右がブリットと書いてあるんですけども、そのサン・ミンさんが参加した美術作家達のワークショップをするグループがあるんですけども、バングラデッシュのブリットというグループに一時期参加していたことがあるので、そういうふう自分が参加したものとか所属してみたものをちょっと書き加えたりするようなことをちょっとなぞなぞみたいなのを、潜ませています。

レポーター：えー、面白いですね。

学芸員：ミャンマーもやっぱり、抑圧社会的に、こうなかなか自由に描けないという時代が、特に政治的なテーマについては自由にいけないという時代が続いたので、最近すごく変わってきてはいますけども、そういう中で、そのどんなにそういう抑圧の時代が長くてもそれにめげずに描くことをやめなかった。やめずに今 60 幾つまですごくアグレッシブに描き続けてきた作家なので、これからもまたどんどん新しい作品を作るんじゃないかなと思ってます。

レポーター：楽しみですね。